

あすは知らねど

マタイ25:1~13 / 李正雨師

先週の主日は、全聖徒主日でした。私たちの信仰の先輩たちを覚えて礼拝をささげ、礼拝の後には教会の墓地がある武蔵野霊園に行き、墓前礼拝をささげました。武蔵野霊園は、1年前とはだいぶ変わっていました。新しい墓地ができただけでなく、無くなった墓地も多かったのです。教会の墓地の隣の墓地も無くなりました。そしてフェンスの方に新しいスペースができました。本当に1年の間、多くのことが変わりました。この世で最も変わらないような墓地でさえも、変化はありました。

武蔵野霊園に行ってきた後、私は去年の春に亡くなった父が思い出されました。父は病気になっていましたが、よく頑張っていました。そのうち、心臓血管拡張手術をすることになりました。手術の経過はよかったのです。だから、父も家族もみんな一安心しました。しかし、手術の後3日目になった日、父にショックが起き、そのショックによって父は亡くなりました。私は、父がもう少し生きるだろうと思っていました。コロナによって長い間、会うことができなかつたので、夏になれば家族と共に韓国に行くつもりでした。しかし、父と会うことはできませんでした。時間は速く、すべてのことは急速に変わります。明日はどんなことが起こるのか、私たちに何が起こるのかは、誰も予測することはできません。このような状況の中で生きる私たちに、今日の福音書は準備について語ります。準備をしている人だけが不透明な未来を賢く乗り越えることができるからです。神の国も同じでしょう。神の国は、準備して待ち望んでいる人のものになるからです。

ある意味で今日の福音書は、準備ができていない人々を叱る言葉のように見えることもあります。しかし、この言葉の意図は、準備に対する叱責や不安を引き起こすことではありません。これは、ユダヤ人の伝統による知恵の話です。過去のユダヤ人たちは、知恵について話すとき、理解しやすくするため、愚かな者と賢い人を比べて話しました。このような対照は、ユダヤの文化だけでなく、私たちの文化にも現れていたことです。対照による教訓と教え、これが対照の目的です。今日の福音書の対照もこれと同じです。イエス様はこの対照を通して、弟子たちに何が賢いことなのかを教えてください。今日の福音書1節の言葉です。「そこで、天の国は次のようにたとえられる。十人のおとめがそれぞれともし火を持って、花婿を迎えに出て行く。」

以前、ある方が今日の福音書を読んで、花婿は一人なのに、花嫁は10人もいるから気になると言われたことがあります。もちろん、旧約聖書には一夫多妻制が出て来ますが、新約聖書の時代に至っては、一夫多妻制はほとんど消え去りました。さらに、今日の福音書の十人のおとめは、花嫁を指しているわけではありません。おとめという言葉である「παρθένος(パルテノス)」は、花嫁ではなく花嫁の付き添いを意味するからです。つまり、花嫁の付き添いが遠くから来る花婿を迎えるために出て行ったのです。なぜ花嫁ではなく、付き添いが花嫁を迎えるために出て行ったかは、分かりません。結婚風習というものが地域によって違うからです。日本も結婚風習は地域によって違うでしょう。私の考えでは、このたとえをおっしゃるイエス様も、たとえを聞いている弟子たちも皆ガリラヤの人であったので、イエス様はガリラヤの結婚風習をたとえとして言われたと思います。

とにかく、花嫁の付き添い10人は、花婿を迎えに出ていました。ここで面白いのは、10という数字です。ユダヤ人の經典であるタルムードによると、結婚式や葬式の行列のためには、10名の人が必要だと書いてあります。また、10名の人がいなければ、シナゴグ、会堂を立てることができないとも書いてあります。つまり、ユダヤ人にとって10人という数字は、何かに着手することができる最小限の数字だったのです。イエス様は、この10人のおとめのたとえを通して、花婿を待つ新しい共同体、すなわちイエス様の教会が始まるということと言われたのです。ところが、この10人は皆が賢い者ではありませんでした。5人は愚かで、5人は賢いと書いてあります。その理由は、一方のグループは油を準備し、もう一方は準備しなかつたからです。

この10人のおとめは、花婿を迎えに出て行きます。しかし、花婿が来るのが遅れたので、みんな眠り込んでしまいました。10人みんなが眠り込んでしまったというのは、賢い者であっても、天国にふさわしい者で

あっても、肉体的な疲れには勝つことができないということだと思います。イエス様の時代には、エッセネ派という宗派がありました。彼らは、世の中から自分を清く守るために、この世と縁を切って暮らしました。清めの儀式と禁欲をし、神秘的な霊的な世界を追求しました。これによって、一部の人々から尊敬されたこともあります。結局はAD1世紀に消えてしまいました。消えた理由は明確ではありませんが、宗教的な限界があったのではないかと思います。私は、私たちクリスチャンがこの世に暮らしながら、信仰のためにいつも禁欲したり、神秘的な世界だけを求めたりすることはできないと思います。もちろん、清くなるために、正しく生きるために努力することは必要だと思います。しかし、清めや禁欲や霊的な世界だけが私たちの信仰のすべてではありません。

私たちは、イエス様の命令に従ってこの世に派遣されました。イエス様はマタイによる福音書28章19節で「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」と言われました。また、「隣人を自分のように愛しなさい(マタイ22:39)。 」とも言われました。これらのことは、禁欲と霊的な世界だけを追求しながら行うことができるものではありません。この世で多くのことを経験しながら行うことです。そのうち、私たちは意図せずに罪を犯したり、失敗したり、つまづかせたりすることもあります。だからといって、この世を避ければ、自分の信仰的な満足のため、禁欲と霊的な世界のためにこの世を逃れるなら、これも愚かなことになるでしょう。マルティン・ルターも、このような理由で禁欲と行いに夢中になった当時の修道院を強く批判しました。私たちが送られた所は、この世です。そして私たちは、この世で疲れて眠り込むこともあります。しかし大丈夫です。私たちには準備された油、イエス様が与えてくださった知恵があるからです。

今日の福音書に戻りましょう。6節の言葉です。「真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。」ついに花婿が到着しました。しかし、問題が生じました。ともし火の油が切れたのです。それで、愚かな者が賢い者にこう願います。「油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです。」しかし、賢い者はこの願いを聞いてくれませんでした。いや、この願いを聞くことができなかったという表現がより正確です。花婿と共に婚宴の席に入る時間がどれくらいかかるかが分からないからです。それで、賢い者たちは油の代わりに自分たちの知恵を分けてくれます。9節です。「分けてあげるほどはありません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。」

これが賢い者たちの知恵あるアドバイスでしたが、婚宴の席を保障することはできませんでした。結局、愚かな5人のおとめは、婚宴の席に入れませんでした。婚宴の戸は、閉まりました。愚かなおとめたちは、婚宴の主人に切に頼みましたが、主人は戸を開けてくれませんでした。これが賢い者と愚かな者の結果、最後でした。イエス様は、このたとえを語られた後こう言われます。13節の言葉です。「だから、目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」

イエス様は、私たち弟子たちが賢い者になることを願っておられると思います。それで私たちは、見えるこの世界だけでなく、天国も準備する人にならなければなりません。皆様、一度考えてみてください。私たちは、私たちの未来のために多くを準備します。積み立て金も払っていて、年金も、保険も加入しています。自分だけではないでしょう。私たちの子供たちの未来のためにも、多くのことを準備しています。ところが、私たちの死後の世界、神の国に入るために何を準備していますか。漠然として何とかできるだろうと思っているのではないのでしょうか。私たちも5人の賢いおとめのように、世の疲れのために眠り込むこともあります。礼拝の時間に眠ることもあり、罪を犯すこともあり、誰かをつまづかせることもあります。しかし、最も大切なこと、油を準備することを忘れてはいけません。私たちがこの世で未来を準備するように、神の国も準備しなければならぬのです。これが知恵あることであり、イエス様が今日私たちに教えてくださる言葉です。あすはどんなことが起こるか、何が私たちを攻めて来るかは分かりません。しかし、油が準備されている人は、イエス様に従っている人は、心配する必要はありません。イエス様が私たちのために天の場所を用意してくださるからです。この世の未来だけでなく、神の国も準備する皆様になりますように。イエス様が皆様に天の知恵を与えてくださいますように、主の御名によって祈ります。アーメン